

日本双生児研究学会

第 13 回学術講演会のお知らせ

日時：平成 11 年 1 月 23 日（土） 午前 9 時～午後 5 時

会場：東京医科大学病院（6 階 臨床講堂）
東京都新宿区西新宿 6-7-1
TEL 03-3342-6111

<プログラム>

1. 特別講演

ベルギー・アントワープ大学産婦人科名誉教授、ロベルト・デローム先生に特別講演をお願いしております。

最近の国際的雙生児学研究的動向について、興味深いお話を聴けるものと思います。

2. 一般演題

例年通り一般演題を募集致します。

募集要項は右記の通りです。

3. ふたごの母親の会

学術講演と並行して、ツインマザーズクラブをはじめとする全国の“双子のお母さんの会”の集会を開催致します。

各サークルの活動状況や運営、その悩みなどお互いに意見を出しあい、さらに交流を深める場にしたいと思います。

4. 懇親会

学術講演会、ふたごの母親の会の終了後、会員懇親会を予定しております。

会場は、学術集会（臨床講堂・会議室）に隣接する東京医科大学職員食堂を予定しています。

<一般演題募集>

[抄録]

演題名、所属、氏名および発表要旨をB5版（400字程度）1枚にまとめた抄録をお送り下さい。

[発表内容]

双胎・多胎に関する医学、疫学、発生学、心理学、教育学、育児サークル活動、民俗学、その他幅広いジャンルで発表演題をお寄せ頂きたいと思っております。

[締切]

平成10年10月17日（土）（必着）

[送り先]

〒300-0095

茨城県稲敷郡阿見町中央3-20-1

東京医科大学霞ヶ浦病院産婦人科

又吉 國雄 あて

（封筒に、日本双生児研究学会抄録と朱書して下さい）

[宿泊等]

学会前後に都内での宿泊を希望される方は、事前に又吉までご一報下さい。会場より徒歩5分、新宿ワシントンホテルをお世話致します。

[会場案内図]

次ページの地図をご覧ください。

[会場案内図]

東京医科大学病院

〒160 東京都新宿区西新宿 6-7-1

電話 (03) 3342-6111 (大代表)

案内図

新宿駅からの交通案内

- 営団地下鉄丸ノ内線

- * 西新宿駅(東京医大病院前)下車

- 新宿駅西口バスターミナルのりば案内

京王バス

(のりば) (行き先)

- ⑮ 渋谷駅行
- ⑯ 新宿循環
- ⑰ 永福町行
- ⑱ 佼正会聖堂前行
- ⑲ 中野車庫前行

- * 新宿住友ビル前下車

都営バス

(のりば) (行き先)

- ㊦ 大塚学園行
- ㊧ 王子行
- ㊨ 駒沢陸橋行
- ㊩ 新代田駅行
- ㊪ 杉並車庫行

- * 東京医大病院前下車

西武バス

(のりば) (行き先)

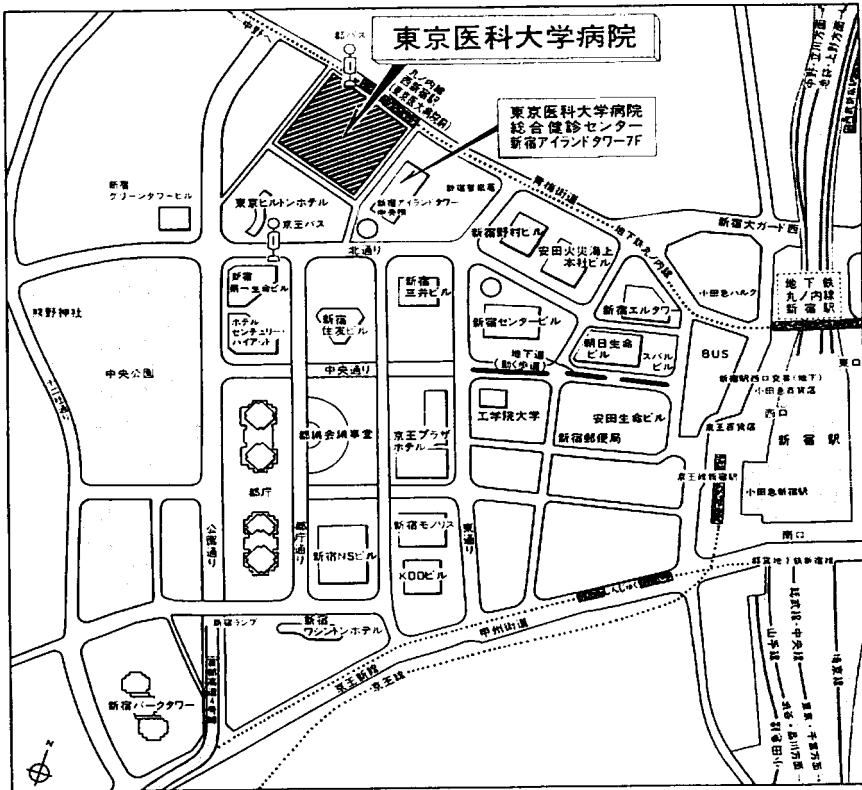
- ⑦ 池袋西武百貨店行

- * 東京医大病院前下車

- タクシー

- * 新宿駅西口より約5分

- 徒歩の場合新宿駅西口より約10分



会員多数のご参加を心よりお待ちしております。

日本双生児研究学会第13回学術集会

会長 又吉 國雄

(東京医科大学霞ヶ浦病院産婦人科)

平成 10 年度日本双生児研究学会第 1 回幹事会議事録

日時：平成 10 年 1 月 24 日(土)12:10～13:00

場所：山梨医科大学看護棟会議室

以下の事項が報告・協議された。

1. 平成 9 年の事業報告

(1) ニュースレター 21 号、22 号を発刊した。

(2) 第 11 回学術講演会が開催された。

大会会長：東京国際大学 詫摩武俊氏 日時：平成 9 年 1 月 18 日(土)

場所：東京大学教育学部附属中・高等学校

(3) 第 5 回研究会が開催された。

日時：平成 9 年 5 月 24 日(土)

講師：岡嶋道夫氏 (演題：皮膚紋理と双生児研究—双生児から双生児モデルとしての近交系へ)

(4) 第 6 回研究会が開催された。

日時：平成 9 年 12 月 6 日(土)

講師：詫摩武俊氏 (演題：心理学における性格の研究)

2. 平成 9 年の庶務報告

現在会員数 145 名

新入会員 16 名

退会会員 22 名

3. 1998-2000 年の幹事・監事選挙について

1998-2000 年の幹事・監事を会長委嘱も含めて次の方々をお願いすることにした。

幹事：浅香昭雄、天羽幸子、安藤寿康、今泉洋子、大木秀一、岡崎祐士、

詫摩武俊、野中浩一、早川和生、又吉國雄、山縣然太郎、小野寺勉

監事：三橋俊夫、飯島純夫

4. 学会名誉会員として次の 4 名の方々が推薦された。

規則：70 歳以上の会員、会費免除とする。

井上英二、岡田敬蔵、岡嶋道夫、詫摩武俊

5. 平成 10 年の事業計画

(1) ニュースレター 23 号、24 号を発行予定。

(2) 研究会を 2 回開催予定。

6. 平成 9 年会計報告と同監査報告が行われた。

7. 次年度第 13 回日本双生児研究学会学術講演会は東京医科大学において、又吉國雄氏を大会会長として平成 11 年 1 月 23 日(土)に開催されることが決定された。

8. 次々年度第 14 回日本双生児研究学会学術講演会は長崎市において長崎大学医学部精神神経科・岡崎祐士氏を大会会長として開催されることが決定された。

平成 10 年度日本双生児研究学会総会議事録

日時：平成 10 年 1 月 24 日（土）

場所：山梨医科大学・大講堂

【1】報告事項

1. 平成 9 年の事業報告

- (1) ニュースレター 21 号、22 号を発刊した。
- (2) 第 11 会学術講演会が開催された。
- (3) 第 5 回、第 6 回研究会が開催された。

2. 会員の移動について

現在会員数は 145 名、新入会員 16 名、退会会員 22 名

【2】協議事項

1. 平成 10 年の事業計画

- (1) ニュースレター 23 号、24 号を発行予定。
 - (2) 研究会を年 2 回開催予定。
- 2. 1998-2000 年の幹事が承認された。
 - 3. 学会名誉会員 4 名が承認された。
 - 4. 次年度第 13 回日本双生児研究学会学術講演会は東京医科歯科大学において、又吉國雄氏を大会会長として行われることが承認された。
 - 5. 次々年度第 14 回日本双生児研究学会学術講演会は長崎市において長崎大学医学部精神神経科・岡崎祐士氏を大会会長として行われることが承認された。
 - 6. 平成 9 年会計報告と同監査報告が行われた。

日本双生児研究学会 1997 年会計報告 (H8.12.27~H9.12.26)

収入の部		支出の部	
会費		通信費	129,870
普通会員会費	489,000	事務費	14,476
学生会員会費	6,000	印刷費	129,400
法人会員会費	20,000	御車代	60,000
		第 10 回大会補助	100,000
		会議費	15,000
		交通費	22,200
利息	3,518		
収入合計	518,518	支出合計	470,946

$$\begin{aligned}
 & (\text{前年度繰越金 } 1,812,507) + (\text{収入合計 } 518,518) - (\text{支出合計 } 470,946) \\
 & = (\text{次年度繰越金 } 1,860,079)
 \end{aligned}$$

一般に人間の行動は自然的環境、物理的環境、社会的環境によって影響を受ける。気候が暑いかわ寒いかわ、高くて危険な場所か毎日そこで暮らしている室内か、お葬式の席か結婚のお祝いの席かで、同じ人の行動であっても著しく相違するものである。しかし環境の諸条件が類似したものであっても、そこで認められる各人の行動には相互にかなりの差が認められる。初めて会ったときから明るく、気楽に振舞える人もいれば何度会ってもなかなか心の中をみせない人もいる。行動の規定要因の中には、その人がおかれている環境の諸条件のほかに行動の主体者である、その人自身に帰せられる要因も多いのである。性格というのは行動の個人差を環境の諸条件からではなく、個人の条件に関して説明しようとするときに用いられる概念なのである。

I 性格とパーソナリティ

性格はcharacter（英）、charakter（独）、の訳語である。昔、土地の境界に目印の石に置き、それに所有者の名前などを刻み込んでいたが、その刻み込む、彫り込むというギリシャ語をこのことばは意味していた。転じて標識を意味するようになったが、語源から考えて静態的で固定的である。

性格については多様な定義があるが、共通するところは個人の行動に見られる感情や意志の特徴であること、一貫性と安定性をもつものであることである。その人を特徴づけている基本的な行動傾向といえよう。

パーソナリティ（personality）はラテン語のペルソナ（persona）に由来するといわれている。これは当時、演劇などで使用された仮面を意味していた。やがてそれは俳優が演ずる役割をいうようになり、さらにその役を演技する人の意味にもなった。語源から考えて社会的役割、外見的な自分という意味が含まれている。

かつてドイツではCharakter（性格）ということばがよく用いられ、Charakterologie（性格学）という講義も開講されていたし、講座の名称にもあった。日本でも以前は性格ということばがよく用いられていた。昭和12年に正木 正と依田 新によって書かれた「性格心理学」という著書もある。英語圏ではcharacterはあまり使用されず、personalityが用いられた。1938年に出版されたオールポート（Allport, G.W.）の有名な著書は“Personality”と名付けられている。わが国でも現在はパーソナリティということばが多く用いられるようになった。これに人格という訳語が与えられ、人格心理学ともいわれるが、もともと人格には道徳的意味が含まれているので、最近の心理学では人格ということばよりパーソナリティと片仮名で表記されることが多くなった。

性格とパーソナリティはほぼ同じ意味に用いられることもあるが、語源から考えて性格が比較的変わりにくい個人的特徴という点を強調しているのに対し、パーソナリティというときには、環境に対する適応機能の全体的特徴がどうかという点を問題としている。したがってパーソナリティには知能、態度、興味、価値観なども含められ、性格よりも広い概念として用いられる。オールポートは「パーソナリティとは個人のうちにあって、その個人に特徴的な行動や思考を決定する心理学的体系的力学的体制である。柏木恵子（1970）はその著書の中で「人格は有機体の行動に特殊的、個人的傾向と統一性・連続性を与えているものの統合」と述べている。ここでの人格ということばはそのまま性格とおきかえることも可能であろう。平易なことばでいえば、性格とはその人の行動にその人らしさを与えるもので、全体としてのまとまりと、過去から現在、現在から将来への

つながりをもつことを示している。

気質ということばも古くから個人の感情的反応の特徴を示すものとして用いられてきた。その特徴は刺激に対する感受性の程度、反応の強度や速度に現れる。これらは個体内部の生理学的過程との関連が深く、先天的に決定されやすいものと考えられている。気質的特徴の個体差は新生児においてすでに認められる。感受性や活動性に関する差異で、音や光のわずかな変化にも敏感に反応する赤ちゃんもいれば、平然として動じない赤ちゃんもいる。

これまでも述べてきたように、性格あるいはパーソナリティということばを用いるときは、さまざまな状況を通して行動に独自性と一貫性を与えるような、持続的な内的特性が個人の中に存在するという考え方が一般的である。他人からみた場合、AはいつもAらしく、一週間前とは服装も違っているし、話したことも違っているが、AはやはりAであり、一週間後に彼と会っても基本的には違っていないだろうという認識がある。ところがこのような安定した特徴の存在に対して、そのようなものは実証できないとミッセル (Mischel, W.) が主張して議論を招いた。

ミッセルの主張の後、状況を越えて行動の一貫性は高いのか低いのか慎重に検討された。そして行動の種類によっても、また個人によっても一貫性が顕著な場合と、そうでない場合もあることが示された。これは日常の知見からも知りうることで、ある人は周囲の状況からの影響が少なく、比較的一貫した行動を示す。孤高を保っていると表現される場合がその一例で、ときに偏屈ともいえるような硬さが認められる。これに対してそのときそのときの状況を敏感に受けとめて適応している人もいる。柔軟といわれることもあるが定見とか信念がないといわれることもある。

われわれは他人に接し、その人を几帳面とか我慢強いと認めて、それに応じてその人と交際している。これは自分がその人の行動や自分に対する態度から几帳面で我慢強いという印象を得ているということで、ほかの第三者もその人のことをそのように見ているとはかぎらない。相手に対する印象は交際を重ねているうちに徐々に変化することもあれば、急に変化することもある。急に変化したときには見損なったとか、見直したとかいう気持ちを体験する。

人は自分が判断し評価したように相手はあると考えがちである。人によって見方は違うのだということは理屈としては承知していても現実にはそれを確かめる機会がない。入社試験の折りなどに、一人の青年Aについて会社側のXとYが面接し、Aの退社後、Aの性格についてXとYが語り合うと、面接した時間も状況も同じであるにもかかわらず、Xが得たA青年の印象と、Yの得たそれとがときに大きく違うことがある。Xは誠実だと評したことをYは愚直だと言う。Yが実行力があると評したことを、Xは軽率だと評する。一人の人物を意志の強い人と評することもあれば頑固な人ということもある。同様に慎重と決断力に乏しい、積極的とあつかましい、さっぱりしていると単純は、それぞれ相互の間に微妙な意味の違いはあるが、同一人物を好意的にみているか、いないかによって異なって評価されていることを示す例である。

このような例はいくらでもあげられよう。他人をどうみるかには見る人自身の性格や人生観が関与しているのである。

II 性格の研究

いつの時代にも性格についての関心はあった。日常の市民生活においても政治のかけひきにおいても、相手の性格がどうであるかを知らないと対応行動ができない場合がたくさんあるのである。どんなタイプの性格があるのか、なぜこの人の性格はこうなのだろうかということが主な関心事であった。

性格に関する現存の最古の書物は、紀元前3世紀にギリシャのテオフラストスによる「エチコ

イ・カラクテレス」(「人さまざま」という書名で邦訳がある)であるといわれている。尊大、食欲、猫かぶり、粗野、おせっかい、虚栄、臆病、けちんぼというような特徴をもった人物を軽妙に描写している。ここに登場する人物はいずれも2千年以上も前のアテネの市民であろうが、人々の現在の生活は当時の生活とは著しく相違しているが、この本を読むと人間の性格は時代が変わり、生活様式が変化しても、それほどかわるものではないという印象を受ける。

ラオフラストスの示した性格考察の方法は西欧の文化の中に継承された。モンテーニュ、パスカル、ラ・ブリュイエールなどの随想録・箴言集に性格についての深い洞察と叡智をみることができ

る。

性格研究のもう一つの流れは、やはりギリシャ時代の気質分類の構想にみることができる。2世紀にガレノスは体内に血液・胆汁・黒胆汁・粘液の4種の体液があるという説に基づき、そのどれが優勢になるかに従って多血質、胆汁質、憂うつ質、粘液質の4つの気質が出現すると考えた。体液と気質を結びつける考えはその後、否定されたが、この4つの気質の名称は今も残っている。人間の性格を何らかの方法で分類しようとする試みは、やがて類型学になるのであるが、その萌芽は古くからあったのである。

III 心理学と性格の研究

性格研究はこのように長い歴史をもっているが、19世紀半ばまでは観相学、骨相学、筆跡学を別にすると、とくに注目すべき考え方の発展はみられなかった。

「性格学(Charakterologie)」という本がドイツの哲学者バーンゼン(Bahnsen,J.)によって書かれたのは1867年のことである。この本の内容は思弁的で、実証的な基礎に立ったものではなかった。

19世紀は自然科学がめざましく発達した時代であった。その中でとくに感覚器官や神経系統に関する生理学の研究が直接的にも間接的にも心理学の発達に影響を与えた。また、心身の数量的関係を研究する新しい学問としてフェヒナー(Fechner,G)は精神物理学を提唱した。このように哲学者や自然科学者によって心理学的問題についての考察や実験的研究がなされ、これが心理学を独立した学問としようとする気運をつくった。物理学が物理現象の法則を研究したように、心理学は自然科学的研究方法を積極的に取り入れて心の現象の一般法則を研究すべきであると考えた。

ヴント(Wundt,W.)がドイツのライプチヒ大学に世界で最初の心理学実験室をつくったのは1879年で、この年は心理学独立の年とされている。ヴントは意識を心理学の研究対象と規定し、内観法によって各自の意識を分析し、化学が複雑な化合物を単純な元素に分析するように意識を心の要素に分析することを目標とした。

現代心理学の基礎はこのようにしてつくられたが、その主流となった実験心理学の研究対象は感覚や知覚の領域に関することが多く、性格のような人間全体を対象とする複雑な問題はなかなか取り上げられなかった。

これに対して精神医学は性格の問題に早くから注意を払ってきた。たとえば精神分裂病においては病気の進行に伴ってほぼ定型的な性格の変化が認められることや、一般の人とは著しく異なった性格の持ち主のことが知られていた。性格についての心理学的研究は精神医学からたくさんのもを学んでいるのである。

整った設備のある部屋で、精密な測定器具を用い、ときには動物を被験体として実験を重ね、個体差をなるべく排除して、心理現象の一般法則を研究しようとする実験心理学と、個体差そのものを問題とする性格心理学とは発達の経過が違い、研究方法も違っていた。両者の間には長い間、交

流がなかったのである。

性格心理学が問題としたのは、まず性格にはどんな類型があるか、どんな特性からつくられているかということであった。性格はどのような構造をもっているかも研究の課題である。性格の発達過程、発達の規定要因も大きな関心をもって研究された。さらに性格の測定、診断のために多くのテストがつくられた。これらに加えて、最近では臨床心理学、発達心理学、社会心理学、精神医学、大脳生理学、コンピュータ科学などの発展と対応して研究が重ねられるようになった。数理モデルを基礎におき、コンピュータを駆使して多量の資料の分析をするという研究もあれば、現代の社会の生んださまざまな不適応現象の詳しい事例研究もある。性格心理学で取り上げられる研究課題も拡大されて、たとえばストレスの対処法、性役割の習得過程、人間関係に関する問題、パーソナリティ発達の異文化間比較の問題など多様になってきた。学際的な傾向はどの学問でも認められるが、性格の研究領域においてもこの傾向は著しく認められる。

「もしあのとき、あのことがなかったら、自分の性格は多分今とは違っていたのではないか」と考えることはよくあることである。親の育て方、きょうだいの有無、怖かった体験、ある人との出会いなど、たくさん要因が性格の発達にはかかわっている。性格の発達過程は複雑である。それだけにまた興味のある問題である。

IV 性格の発達

性格の発達に関しては、大別して2つの研究テーマがある。一つは時間の経過、年齢の増加に伴って性格がどのように変化していくかという問題である。たとえば複数の4歳児には活発さ、気おくれの程度、やさしさなどについて、それぞれ個体差があるが、4歳児には4歳児にほぼ認められる共通の特徴がある。同じように青年には青年らしい、高齢者には高齢者らしい、ほぼ一般的に認められる特徴がある。このような加齢に伴う性格の変化過程を明らかにしていこうとするのが第一のテーマである。いろいろな年齢層について調べる横断的研究法が用いられることもあれば、1つの対象を追跡的に調べる縦断的研究法が使用されることもある。

第二は性格発達の規定要因の研究である。性格に認められる多様な個人差の成因分析ということである。性格は素質を基礎にして、さまざまな環境や人間関係に対する適応過程を通して形成されるものである。しかし性格は素質という、比喩的にいって内側からはたらきかけるもの（内的要因）と、環境という外側からはたらきかけるもの（外的要因）によって受動的にのみつくられるものではなく、意欲的、能動的に自分でつくっていこうとする要因（自己形成の要因）もある。思春期以降にこの要因の果たす役割は大きい。さらに性格の発達を考えたとき、偶発的で1回だけのできごとが、その個人に深い影響を残すことがある（一回性の要因）。自叙伝の中によく述べられていることであるが、ある人との出会いや別れがその個人の心のあり方を変え、生涯の進路を決定づけてしまうようなことがある。次に4つの要因について順に述べることにする。

1) 内的要因

遺伝

遺伝というのは、遺伝子を通して親の世代のもつ特徴がこの世代に伝達される生物学的現象である。人も生物であるから生物全般に認められる枠の中に含まれる。人間からは人間しか生まれない。ネコにネコ特有の姿勢、能力があるように、人間にも体格、動作、能力などに人間としての共通点をたくさんもっている。血のつながった親子の顔立ちにはかなりの類似性が認められる。種属としての特徴や、身体の形態学的特徴が遺伝することは広く認められているが、性格のような心理的特

徴も遺伝するか、するとすればどの程度か、ということが古くから問題とされた。すべてが遺伝によって決定されるという生得説も、人の心は当初、白紙のようなもので生後の経験によってつくられるという経験説も、そのままのかたちでは支持されず、遺伝に基づく素質と環境の相互作用によってつくられるというのが妥当な見解である。実際には素質がどんなかたちで現れていくかは環境の条件によるし、また、特定の環境のはたらきかけがどんな効果や影響をもたらすかは素質のいかんによって左右される。

(1-1) 親と子の類似

親と子がともに温厚で人あたりがいい、あるいは短気で粗暴である、という風に、親と子の類似はたくさん指摘されてきたが、親と子は普通同じ家屋の中に起居し、子どもは親の行動をみて学習している。親は子どものモデルになることが多いのである。さらに、たとえば音楽家の家に生まれた子どもは、早い時期からよい音楽を聞き、楽器に接触する機会も多い。音楽的才能を伸ばすのに適切な環境にいるわけである。したがって親と子が性格や能力に関して類似していることが事実であっても、そのことからその特徴が遺伝したとも、生後習得したものとも判定することはできないのである。遺伝的要因と環境的要因とを分離できないので、親と子や、血縁関係にあるものの相互比較は研究方法として不十分とされるのである。

(1-2) 双生児の比較研究

遺伝と環境について双生児の比較は有力な研究方法である。双生児の研究方法については省略するが、多数の双生児についてテストや実験をしたり、行動の観察をしたりして一卵性双生児間での差が小さく二卵性双生児間での差が大きいという特徴が見つければ、その特徴は遺伝しやすいものと考えられる。一卵性双生児で生後、何らかの事情があって二人が分けられ、別々の環境で成長したもの、あるいは高年齢の双生児で生活に大きな差のあったものを相互に比較し、環境の違いにもかかわらずよく似ている面が見出されれば、それはやはり遺伝的に規定されやすい特徴であろうと考えることができる。

双生児の研究というのは双生児についてだけの研究ではない。一卵性双生児相互間、二卵性双生児相互間の類似性、相違性を比較、検討することによって、何が遺伝するのか、何が環境によって規定されやすいのかという心の発達一般の問題を解明しようとするものなのである。双生児の研究は数多くなされている。前述の通り、テスト、実験、質問紙調査などのほかに、生活をともにしての行動観察という方法がよく用いられる。海や山に双生児たちと研究グループが一緒に行って、起床から就寝までの全生活時間、遊んでいるときの様子、勉強しているときの態度などを詳しく観察するのである。気分の変化、双生児の相手やほかの双生児に対する態度、好奇心、争いごとに対する対応の仕方などを、そのときの状況の流れとの関連の中で観察するものである。これらのさまざまな研究結果からほぼ一致していえることは、活動性、感受性、知的能力などに関して一卵性双生児相互間の一致度が、二卵性双生児相互間のそれにくらべて大きく、その意味で遺伝規定性が大きいと考えられるのである。身長、体格、顔立ちや運動能力、特定の病気のかかりやすさなどについては、心理学的諸特徴よりも一般に高い遺伝規定性が認められる。

(1-3) 身体的特徴からの影響

身体の諸器官の構造や機能が性格に大きな影響をもつことがある。たとえば、自律神経系のはたらきは精神的テンポ、疲労しやすさなど情意的側面と密接な関係をもつといわれている。甲状腺・副甲状腺・性腺などの各種ホルモンの分泌が過剰になったり、不足したりしている場合には、

それぞれ特色のある方向に性格が変化することが知られている。覚醒剤や麻薬の常用が、性格を変えてしまうことも日常よく聞くことである。

以上身体器官の機能が直接に性格に影響を与えている例であるが間接的な影響の場合もある。たとえば個人の体格や容姿が社会的にどのように評価され、どのように自己認知しているかによって二次的な効果を性格発達の上に及ぼすことがある。性格という行動上の特徴も身体的過程と密接に関係している。しかしその関連の仕方は直接的な場合もあれば間接的な場合もあるのである。

2) 外的要因

外的要因とは個体の外側から働きかける要因で、環境要因と普通いわれているものである。環境というと自然的・地理的・物理的環境が連想されやすいが性格の発達を考えるとときには社会的、文化的、家庭的環境がきわめて重要である。

人は親の手をわずらわすことのもっとも多い生物である。生物の中には自分の親を知らずに成長し、巣をつくり子どもを生み生活を営んでいるものもたくさんある。人は本能という生得的な適応手段をほとんど備えていない。人は人の手で育てられないと人らしくないのである。

人の特徴の中には、たとえば目の色、血液型などのように発達のごく初期にきまり、生涯を通じて不変のものもあるが、性格は長い時間の経過の中で徐々に発達していくものである。親がどんな態度で子どもに接し、どんな人間に成長することを望んでいるかということが子どもの性格をつくっていくうえに大きな影響力をもっている。本能に従って行動する生物は一般に行動の可変性に乏しい。固定した習慣、固定した行動が多いのである。それに対して人間は生後につくられる余地が大きい。一卵性双生児であっても一方を兄、他方を弟として、一方を兄らしく、他方を弟らしく育てると、一方に控え目、親切、責任感が強いといった兄らしい性格が、他方には快活、社交的、依存的などの弟らしい性格がつけられていくことが知られている。親の影響力は大きいのである。

(2-1) 外的要因の内容

個人の性格の発達に及ぼす外的要因を順不同にあげると、次のような項目が考えられる。生まれた家庭の要因、家族構成、育児方法や育児態度、友人関係・学校関係、文化的・社会的要因である。

便宜的に5項目に分けたが、性格の発達に及ぼす外側からの要因のすべてがここにあげられているわけではない。国のために尽くすことが奨励され、生活全体が貧しかった時代であったか、全体に贅沢で享樂的な時代に育ったかという、時代に関する要因も無視できない。

性格の発達に及ぼす外的要因の例

■ 1 生まれた家庭の要因

- ▼親の年齢・教育歴・職業・収入・宗教・人生観・価値観・子ども観・性役割観。
- ▼その家庭の一般的雰囲気。
- ▼父と母の関係
- ▼その家のある地域の諸特徴。

■ 2 家族構成

- ▼家族構成員の人数や関係。三世代家族、核家族などの家族形態。

- ▼きょうだい数と出生順位。異性のきょうだいの有無。きょうだい間の年齢差。出生順位による親の期待内容。
- ▼家族間の愛情の程度。

■ 3 育児方法や育児態度

- ▼授乳や離乳の仕方。
- ▼食事、睡眠、着衣、排泄などの基本的習慣のしつけ。
- ▼他人に対する態度、感情の表出（怒り、甘えなど）に関するしつけ。
- ▼親の子どもに対する一般的態度（保護的、拒否的、放任的、溺愛的、受容的、支配的など）。

■ 4 友人関係・学校関係

- ▼友人の数・つき合いの程度。友人との遊びの時間や場所。遊びの内容。友人集団内での地位。
- ▼幼稚園や学校の教育方針。担任教師との関係。

■ 5 文化的・社会的要因

- ▼その社会の生活様式・宗教・習慣・道徳・法律・価値基準・政治形態・歴史・地理・人間関係観・性役割観。
- ▼ほかの社会との関係。

(2-2) 外的要因の複雑さ

人間の性格は生後の環境条件によって、その発達が影響されることは誰もが認めていることである。ただその影響の仕方は多くの要因が複雑に関連している。実験心理学者が、たとえば錯視の量を規定する条件を、刺激図形を変えたり、注視点を変えたりして研究するときの条件の違いよりはらずと複雑なのである。

多数例についての研究が意味がないというのではない。非行少年を出しやすい外的要因が判明すれば、その予防にそれは役立つことになる。それとともに周囲の外的要因は非行化を促進するものであったにもかかわらず、非行化しなかった少年についての研究も必要である。

人が生後経験することの多くのことの中で、性格の発達に強い影響力をもつのは親との関係であり、とくに幼児と親との関係はきわめて密接である。

3) 自己形成の要因

自己形成の要因とは自分で自分の性格を一定の方向に意欲的、能動的につくっていかうとすることである。小学校の後半頃から人は自分自身を1つの対象としてながめることができるようになる。主体としての自分が客体としての自分を考え、自分の設定した理想像に対して、自分を近づけるような努力をするようになる。もっと勇気のある人になりたい、もっとみんなに好かれる自分でありたい、というようなかたちで現れる。自分をきたえ、自分を向上させようということに青年期ほど一生懸命になる時期はない。

しかし性格には決意し努力することによって作り直せる面と、それが難しい面とがある。努力しても変えにくいと気がついたとき、すぐに諦めてしまうこともあるが、相手の人に自分の違う面を印象づけようとすることもある。舞台の上で俳優が、あるときは王様を、あるときは盗賊を演ず

るように、本来の自分とは違う姿を演技してみせるのである。これを印象管理という。おとなの日常生活を考えてみればわかるように、相手と自分との関係を考えて、いいたいことを我慢したり、相手の気持ちを汲みとって儀礼的なほめことばを述べたり、こちらの弱点を気づかれないように話題を選んだりする。子どもは相手の心に映った自分の姿をあまり考えない。しかしおとなになるにつれて自分をどのように印象づけようかと苦心する。子どもの場合は、見たままの性格がその子の性格と考えてまず差し支えない。しかし成長とともに外づら、内づらということばもあるように表面の性格と内面の性格との間に微妙で、複雑な相違ができてくるのである。

相手に与える印象が変化したからといって、その人の性格が変わったとはいいい切れない。しかし自分の立場を自覚し、それらしく振舞うことによって自分が変わっていくこともある。性格の自己形成というはたらくは青年期だけではなく、それ以降にも認められる。

4) 一回性の要因

これは広い意味では外的要因、つまり環境からの影響ということに含まれよう。しかし前に述べた環境要因というのは、ある期間持続的にはたらくものである。それに対して一回性の要因と名付けたものは、文字通り1度だけの、しかも多くの場合、偶発的な体験である。自分の過ぎた日を静かに振り返ってみれば、誰でも2つや3つは今日の自分の性格や生き方に大きな影響を残しているできごとをあげることができよう。大きな感動があったことが共通している。驚き、怒り、喜びという感情が伴っている。ある本の一節を読んだこと、ある人の講演を聞いたこと、事件を目撃したこと、ある人物の意外な面を知ってしまったこと、ある人との出会いや別離など、そのできごとはさまざまである。1つのできごとがすべての人に同じ感動を与えるものではない。友人がつまらなかったと評した講演が、自分には大きな感激となることもある。

異性に対する好みとか自分の職業の決定というようなことがこのような体験に基づいていることもある。本人が気がついていないこともあるが、われわれの人生には、ときどきそれまでの進路を変えさせてしまうようなできごとがある。

性格の発達について散文的に述べてきた。1人1人の発達過程は、それぞれが興味深い内容をもっている。性格発達を規定する要因は確かに存在する。しかしそれを解明するのはきわめて難しい。各人の遺伝要因がさまざまである上に、多様な環境要因が長い時間の経過のうちにはたらくかけているので、そこにはたらくしている法則性を見出すことが容易にはできないのである。性格発達の規定要因の研究は心理学の大きな課題であるが、きわめて難しい問題である。

以上、述べたことは性格の研究に関して私が考えていることで、研究会の席で話したことの必ずしも要約ではない。当日、私が申し述べたことに関連して次のような趣旨の質問を頂いたのでお答え申し上げる。

1) 「臆病な人」などについて書かれた古い本があると聞いたが、何という本か。

それは多分、Theophrastos が紀元前3世紀の頃、書いた本と思う。テオフラストスはアリストテレスを継承した哲学者で、また植物学の祖ともされている。彼は性格論も書き、そこで臆病な人、粗野な人、食欲な人などを風刺、諧謔を交え、当時の世相を描いた。この本は「人さまざま」という表題で岩波文庫にも収められている。

2) 性格発達の「歴史的一回性」とは何か。

人は自分の過ぎた日を顧みて、自分の生涯の方針や性格そのものも変わってしまったのではないかと思うようなできごとを持っている。多くは偶発的なできごとで、そのとき、そこにいたことがそれ以降の人生に大きな影響を与えるようなことである。双生児の場合にもあるわけで、一方がたまたま読んだ本や偶然知人から言われたことが心に残り、職業決定や価値観を左右することもあるであろう。このような要因の研究も心理学には必要と思う。

3) Character と Personality

ともに人の個人差を論ずるときに用いられる概念であるが、Character の語源は、昔、土地と土地の境界に石を置き、それに目印となることを刻みつけていた、その刻み込むという意味であったといわれる。これはやがて標識という意味になるが、語源から考えて静態的、固定的である。一般に性格と訳されている。

Personality は古代ギリシャで演劇に用いられた仮面を意味していた。転じてある役割を演ずる人となった。周囲に対する適応の仕方を重視し、Character より広い意味で用いられている。人格と訳されることもあれば、パーソナリティとそのまま使うこともある。ドイツ語では Charakter がよく用いられ Charakterologie(性格学)という講義もあれば講座名もあった。英語系の心理学書では personality がドイツ語の Charakter とほぼ同じ意味に用いられ、character の方に道徳的意味を持たせている。評価された personality が character であるという見解もある。英語の personality とドイツ語の Charakter、英語の Character とドイツ語の Persönlichkeit が意味的には近く用いられている。わが国の心理学は当初ドイツからの影響が強く、Charakter に性格という言葉をあて、戦後英語圏で多く用いられていた personality に性格ではなく人格という言葉をあててしまったという事情があったようである。佐古純一郎著「近代日本思想史における人格概念の成立」(朝文社,1950)という著書が参考になると思う。

4) ゲシュタルト心理学とは何か

20世紀初頭にドイツの M.Wertheimer,W.Köhler,K.Koffka,K.Lewin によって主張された心理学。この学派の人々は、W.Wundt の構成主義の心理学(簡単感情、純粋感情というような心理要素から複雑な意識が構成される、と考える立場)に反対して、人の心理現象として表れるものは本来全体としての独自性をもっていて、全体は単に部分が寄せ集まったもの以上の性質を持っていると考える。例えば、あるメロディーの与える全体的印象は、個々の構成音が与える個別的印象とは別のものであり、しかも同じメロディーは何調で演奏しても同じメロディーとして聞こえる。このように全体的特性はその構成要素をとりかえても同じに保たれるし、さらに一部の構成要素が欠けていても、同じような全体的特性が経験される。つまり従来の心理学が考えていたような刺激と感覚との間に一対一な対応関係がいつでも存在しているとは限らず、またそれぞれ独立の感覚要素が基礎にあって、それが集まったり離れたりして全体的特徴が作られることを示す事実もないのである。

ゲシュタルト心理学の理論では、むしろ逆に、個々の要素の特性はそれがいかなる全体の中に組み込まれたかによって制約され、同一の要素もそれを含む全体の特性が変化すれば異なってあらわれるということを強調した。比喩的にいえば、単純な過程をもとにして複雑な全体過程の構成を説明する立場を下からの心理学説とすれば、全体過程を基本として、それに制約されるものとしての部分を説くゲシュタルト心理学は、上からの心理学説ということが出来る(大山正、詫摩武俊、中島力「心理学」(新版、有斐閣,1993,p.21から要約))。

5) Entwurzelung 体験とは何を読んだら出ているのか。

事典によると、1951年に Bürger-Prinz が Entwurzelungsdepression(根こそぎ抑うつ)として報告したうつ病の一種で環境の急激な変化により家族、財産、地位、名誉などを根こそぎ奪われたために発症するといわれる。

Entwurzelung という言葉は、1957年秋、初めてドイツに留学したとき、Lersch 教授が V.Frankl の著書「Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager」(邦訳「夜と霧」1961、みすず書房)を読むことを勧めたので、私にはとくに印象に残っている。

第9回国際双生児研究会議に出席して —主として COMBO 関係—

天羽幸子

東京、リッチモンド、ヘルシンキと今回も私を含め16人(一人お父さん)のツインマザーズが、はるばる北欧を訪れた。

大塊全体の印象は手作りで偵察に、でも心から参加を歓迎するという雰囲気であった。いつも使われている研究棟のガラス戸に、国際双生児研究会議という小さなピラが一枚張り出されているだけで、私たちはおそるおそるそのドアを押した。

COMBO (Council of Multiple Birth Organization) の Session は6月4日、5日、6日の午前中に行われ、アメリカの Pat Malmstrom さんの司会で進行した。

6月4日、最初に、それぞれの親交を深めるため、階段教室の脇に、COMBO に参加した年代ごとのグループに分かれて話しあった。私たちはローマから参加しているので、古い方のグループで、日本、カナダ、イギリスなどで、ツインラインなどについて話しあった。

又参加各国の双生児の年間出生率のごく概略の発表を、黒板をつかって提示した(いずれも今泉洋子先生の詳細な報告がニューズレターに載る予定なので省略する)。

今回はアジアからの参加は日本だけであったが、日本の双生児出生率は群を抜いて低い方であった。

各国の代表者が特にリッチモンド以降の新しい活動について報告した。

- ・フィンランド: FINLAND'S MULTIPLE FAMILIES ASSOCIATION は1995年に国内の10の組織をまとめるために役立たされた。本部はヴァスキュラにあり、会員数約1万人(主婦として入会している)。1982年以降、親同士で毎年全国大会を開催しており、今年は14回目になるという(この会合に、私たちは参加することができた)。
- ・ベルギー: Robert Derom 博士が代表として発言した。ベルギーはEUの中でも最も多胎児の出生率が高い国であるが、第一子の出産の平均年齢が29歳を上回るようになって以来出産数も低下する傾向にある。現在、多胎児を出産した母親が2~3ヶ月で仕事に戻らなければならない
- ・ので、2~3年は家にいられるようにする制度の確立を目指して活動している。
- ・スウェーデン: この会議で、副議長をつとめた Margareta Olwe さんが発表。双生児と3つ子のクラブが別々にできており、活動も別に行っている。
- ・スイス: Sabitte Herbenen さんという本人も双生児のひとりだという人が一人で参加し、フランス語圏なので英語は今ひとついいながら、年3回の集会を開いていると述べた(日本のツ

インマザークラブは、スイスの Gansengen にあるドイツ語でニュースレターを出しているグループと交流しているが、彼女はよく知らないようだった)。

- ・カナダ：10代の双子を持つお母さんが2人で参加し、主な活動はミーティング、ツインライン、ニュースレターの発行など。
- ・アメリカ：2万1千人の会員をもち、地方組織としても450くらいある。政府の支援もある。専門家によるカウンセリング、電話相談、ホームページなどで情報を提供している。
- ・イギリス：TAMBA (Twins and Multiple Births Asso.)として活動し、5000人の会員をもち、財団からの寄付と21名のボランティアによって運営されている。活動はニュースレターの発行、集会、ツインラインなどが主で、3歳から11歳までの多胎児の声をまとめた本の出版や、ツインラインに寄せられた相談内容などについて述べた。
- ・日本：日本のツインマザークラブはこの秋、創立30周年を迎える。前回の会議から3年間をふりかえって、大きな変化は会員数の増加に対応するため、コンピュータを備えた新しい独立の事務をもつことができたこと。

第二はツインライン（電話相談）の設立と事務局でも専門家による相談が加わり、順調に活動している。第三は英文によるニュースレターをつくり、世界各国とのニュースレターの交換ができるようになった。

その後、COMBOの議長を選挙することについて、どのような形で（特に国を代表する場合に何票を与えるか）行うかで意見がわかれた。

今回このSessionだけ通訳をたのんだが、階段教室の上段にかたまっていたが、多少他の国の人には耳ざわりに思えたようで、今後どのように改善したらよいか課題である。

- ・6月5日COMBOグループがISTS (International Society for Twin Studies)のworking groupの一つとして活動することが認められたためニュースレターを出すことになり、その編集グループに参加する。
- ・代表者選挙
昨日からの懸案だった各国の団体としての投票数は5票ということになり、ISTSの個人会員は1票で、私は6票の権利を持つことになる。
選挙結果、議長 Pat Preedy(UK) 編集 Rebecca Moskwinsk(USA) プログラム Jennifer Noonan(Australia) 会計 Margareta Olwe(Sweden)

6月6日、ヘルシンキからバスで1時間ほどの湖水のほとりの保養地であるエスポーでフィンランド多胎児の親の全国大会がひらかれたので、私たちは午後から全員参加する。

参加国は日本のほかに、イギリス、カナダ、スイス、ロシア、フランス、フィンランド。フランスとロシアは第一日目の会議には参加していなかった。

今回の会議で一番困ったのはプログラムがあまりはっきりせず、前もって入手できないということであった。多分フィンランドの親の会でも日本の実状の紹介はあるだろうと考え、その英文をバスの中で考えることと、ご挨拶だけでは、せつかく15人も出席するのにさびしいと思い、日本のうた、「花」をコーラスで歌うことを考え、少し練習しておいた。

会場は湖のほとりの田舎風の建物に、フィンランドの若い夫婦（ほとんどがカップルで、子どもの姿はなかった。後で聞いたところによると、親たちにあづけたりして、こぶつきでないのが特徴的）がぎっしりとあつまっていた。

予想どおり、会議では各団体の代表者がそれぞれの組織を紹介した。若い人たちが多かったが、

すべてフィンランド語の通訳がはいった。私たちは私の発表のあとで全員黒いTシャツ姿で、日本のツインマザーズクラブのマーク入りの下に赤い折り紙でサンタクロースをつけ、「花」を歌った。聴衆はもとより、イギリスの参加者からも、すてき、ありがとうといわれて、嬉しかった。ロシアの代表者はサンクトペテルブルグからきた一見おばさま風だが、立派な遺伝学者で、ロシア、特にペテルスブルグの双子の会の世話役（実は2日目の昼休みに15組ほど双子たちが、食堂で歌をうたった）をし、すばらしい声量で民謡をきかせてくれた。フランスの代表は8ヶ月の双子がいるという若いお母さん。イギリスはスライドを使って、活動を紹介した。

会議のあと、私たちは持参した折り紙のおひなさまや、あねさま人形を、代表者やフィンランドのお母さんたちにプレゼントし、とても喜ばれた。

私はこの国際会議にローマ以来4回参加したが、なかなかその国の普通の双子のお母さん（代表者でなく）に接することができなかったが、今回短い時間ながらその機会があり、日本から参加したお母さん達も興味深い話ができたとと思う。

第56回日本公衆衛生学会総会自由集会

第6回多胎児を産み育てる家庭への保健サービスのあり方を考える集会 報告

国立公衆衛生院母子保健学部 加藤則子

日時：平成9年10月16日（木） 18：00～20：00

場所：横浜市研修センター 604、605号室

横浜市中区山下町72-1（中消防署山下町出張所3階～7階）

代表世話人：大阪大学教授 早川和生

1. 双子の気質について

野口恭子（広島大学医学部保健学科）

生後30ヵ月前後の双子に関する調査。月齢が増すと相違が出てくる。

性別の違いは少なく、出生順位の影響がむしろ多い。

一卵性でも気質が異なり、関心は同じがいいが、同じような接し方でなくとも良い。

2. 5年目を迎えたピースの会の活動

稲垣美幸（中野区中野北保健所）

年2回行っている。自主グループ化できない要因：①外出が困難

②児童館とつながりにくい③児の年齢がばらついている

3. 市と保健所が協力して行った多胎児家庭の支援

三谷泰子（青梅市健康センター）

平成5年双子の母親の声をきっかけに市と保健所で管理カードから多胎児の把握を行い交流会を定期的に開催。社会福祉協議会等を知る。

平成6年自主グループ発足

指定発言：福田節子、光岡重子（千葉県野田保健所）

平成6年実態調査 以後年1回交流会開催。自主グループへの発展は困難

4. 多胎妊婦・乳児に家庭訪問を行って ----その実際と効果----

橘 薫 (風っ子KIDS代表)

個別相談 TEL SOSを重視 同じ悩みを持つ母親を紹介
妊婦・乳児の訪問 安静を強調したことで早産がなくなった
市への要望 専門保健婦・育児環境整備 市長へのメッセージ
いしかわ子育て支援財団との連携 雑費支援 講演会開催

5. 双子の妊娠・出産・育児の実体験からサークルの必要性を感じて

高里真美 (すこやかサークルツインキッズ代表)

すこやかサークル (育児グループ) のひとつの班として発足
月1回の集会 子どもの保育の方法を知らなかった ボランティアが来てくれた。
自主的なサークルでやるにはたくさん問題、たくさんの犠牲。

6. アンケートに見られる多胎児の親の負担と行政への要望

久保田奈々子 (ツインキッズクラブ代表)

会員 1600 人に送って 875 人から回収。
多胎妊娠の指導はハイリスクであることをきちんと説明して欲しい。
健診等に一人で来たことを責めたりせず、手助けして欲しい。
声がけはあいさつやはげましのつもりかもしれないが、安易な発言や好奇心がづらい。
駆け込み寺的相談窓口があってほしい。ヘルパーを頼もうと思ってもがんばってしまった人が多い。

自由討論

横浜市瀬谷保健所

双子の母である保健婦が3年越しの働きかけで区づくり事業として発足。
天羽幸子先生の講演。会には保育のためのボランティアにきてもらう。

墨田区保健所

双子のグループが2年前から発足。訪問で知り合った人を中心に。

社会教育・生涯学習等は子育て支援予算が取りやすい。

ボランティアセンター等への働きかけ。

- ・行政の仕組みが見えないことが多い。案内してくれる (あげられる) 人が必要である。
- ・保健従事者の中に現状を知らない人が多すぎる。文句があれば言って欲しい。

Matt McGue 教授(ミネソタ大学)を囲む会 報告

7月29日(水) 18:00より、ミネソタ大学心理学部教授、Matt McGue 氏を慶應義塾大学三田キャンパスに招いて、氏が永らく関わっているミネソタ双生児研究についての話を聞いた。

Matthew K. McGue 教授は1952年生まれ、現在45歳の行動遺伝学者で、カリフォルニア大学バークレー校を卒業後、ミネソタ大学で博士号を取得、ワシントン大学を経て、1985年からミネソタ大学に勤務している。現在の研究テーマはアルコール依存や薬物依存に関する行動遺伝学だが、知的能力やパーソナリティに関しても数多くの重要な論文を発表しており、統計的手法についてもくわしい。

今回の来日は、氏の9歳になるご長女が所属するミネアポリスの劇団の来日公演に保護者として

付き添ってこられたもので、ストックホルムでの行動遺伝学会のときにその予定をうかがったので、ぜひこの機会にお願いして、われわれが断片的にしか知らないミネソタ分離双生児研究や、最近の行動遺伝学の紹介をしていただいた次第である。以下は当日の氏の話の要約である。メモも取らずに聞いたものを書き起こすので、少なからず誤りがあるかもしれないが、ご容赦願いたい。当日ご参加の方で誤りや追加にお気づきの点があったらご指摘いただければ幸いである。

つい最近(1980年ごろ)に至るまで、心理学には依然として個人差を環境だけから説明し、遺伝要因を無視する傾向が残っており、「異なる文化に育った一卵性双生児の違いを想像してみれば、遺伝の影響の小ささがわかるだろう」という表現が平気で登場していた。

ある時(1978年だったと思う)偶然にマスコミで、驚くほどよく似た別々に育った双生児のいることが報じられた。彼らはたまたま町でよく間違えられ、よく調べてみたらうり二つの別人であることがわかったのだが、当人同士も双子であることは知らなかったらしい。たまたまふたりともジムと名づけられていたのだが、二人の類似性は驚くべきもので、同じ名の女性と結婚し、同じく離婚して、後妻の名前も同じ、子どもにも同じ名前をつけていた(ただしその名前はアメリカ人にはよくある名前であった)。同じシボレーの車で休暇をフロリダの同じ海岸で過ごし、ちょっとした癖もそっくりだった。

この話に興味を抱いたのがミネソタ大学のブシャード(T. Bouchard)教授で、彼はこれをきっかけに組織的に別々に育った双生児を集めはじめた。多くは偶然やロコミ、あるいはマスコミを通じて双生児であることがわかったようなケースで、現在約130組あるという。第二次大戦直後の諸事情で別々になってしまったケースが多く、したがってサンプルの平均年齢は高い。そのほとんどが生後数週間以内に分かれており、自分自身が双生児であることが知らないケースが多い。彼らはミネアポリスに1週間ほど滞在し、心理検査から生理検査に至る延べ50時間にも及ぶさまざまな検査を受ける。また検査は10年ごとに縦断的に行われる。

ミネソタではこの別々に育てられた双生児の研究をはじめとして、ふつうの同環境双生児、そして養子による研究(ちなみに McGue 氏のお嬢さんも韓国からの養子である)など複数のプロジェクトが並行して進められており、数億円にのぼる研究費と、50人を超す研究スタッフが関わっている。データは研究者間のコンピュータネットワークで共有されている。分離双生児のプロジェクトの中心はブシャード教授であり、マギュー教授はアルコール依存に関する養子と家庭研究を担当している。

一卵性双生児と二卵性双生児の類似性の比較から人間のさまざまな形質の遺伝的影響力を体系的に調べてみると、病気などの生物学的形質のみならず、知能やパーソナリティなどの心理学的形質にも同じように強い遺伝規定性が見いだされ、しばしば心理的形質の方が高い遺伝規定性が見いだされるほどである。

特に別々に育った一卵性双生児の類似性は、そのまま遺伝の影響力の推定値となるが、それが示す驚くべき結果は、とりわけパーソナリティでは、一緒に育った一卵性も別々に育った一卵性も、その相関係数が0.5程度で、ほとんど変わらないということである。このことは、一緒に育つことの効果、つまり共有環境の効果はほとんど全くないということを示す。環境の影響のうち重要なのは、同じ家族メンバーでも異なる非共有環境であり、共有環境の占める割合はとても少ないというのは、行動遺伝学が見いだした最も興味深い発見といえる。なぜなら発達心理学や精神医学では、もっぱら家庭環境=共有環境に個人差の原因を見いだそうとしてきたからである。

しかし知能(IQ)の場合は、パーソナリティとは異なり、二卵性双生児の類似性(0.60)は一卵性双生児(0.86)の半分より大きく、また同環境一卵性の方が異環境一卵性(0.70程度)よりも類似し

ており、共有環境の影響が認められる。ただし興味深いのは、別々に育った一卵性の類似性から推定される遺伝率 70%は、通常の一卵性と二卵性の比較から得られる値 50%より大きいということである。この別々に育てられた一卵性双生児の相関については、ミネソタ研究のみならず、過去に得られたいくつかの小規模の同様な研究でも、ほぼ一貫した結果が得られている。これは通常の双生児研究の被験者の多くが子どもであるのに対して、別々に育てられた一卵性双生児の平均年齢がそれよりもずっと高いことによると考えられる。

というのも、最近の知能の遺伝規定性に関する発達の研究から、知能の遺伝率は発達と共に大きくなることが示されているからである。すなわち遺伝要因は、一生の間固定的なのではなく、発達の的な変化にも影響をしている。このことは双生児の顔立ちの変化を考えてみればわかる。（ここである女性一卵性双生児の赤ちゃん時代から老年期までの写真を順に示して）このように顔立ちは個人内で変化するが、その変わり方は双子の間で等しく、その変化の仕方に強い遺伝的な水路づけがなされている。

なお共有環境のうち重要なものは出生前の子宮内の環境である可能性が大きいことが指摘されている。

現在はデンマークの研究者と共同して、アルコール依存症の双生児研究に関わると共に、大規模な養子研究（養子の半数は異人種間）にも関わっている。

質疑応答の部では、一緒に育った双生児と別々に育った双生児とでは、双生児体験や双生児意識が異なり、自我の発達に異なる影響があるのではないかという質問に対して、少なくとも同環境と異環境双生児の間に、パーソナリティの次元での差異が見いだされないことから、そうした違いはほとんどないのではないかという答えがあった。また流動性知能と結晶性知能の遺伝的影響に差があるかどうかについての質問では、もとの理論に反して、遺伝的な差異はなく、理論そのものに問題のある可能性があるのではないかと、ただし知能構造に対するそれに代わる新しい積極的な理論をうち立てることはしないということであった。

出席者は10人程度のこじんまりとした会であったが、会後の懇親会も遅くまでなごやかに話題が弾み、McGue氏も大変喜んでおられた。能登佐先生が一卵性のごきょうだいの柴田右人先生をお連れになって一緒に参加して下さい、最後までおつきあいいただいたことはとてもありがたく、印象的であった。またこの日の会には都合でご参加いただけなかったが、吉田啓治会長からの「財政的援助」を、懇親会とMcGue氏へのお礼として役立たせて頂いた。この場を借りて感謝申し上げます。

(安藤寿康 記)

「ふたりのロッテ」についてのふたごからの読書感想

小島潤子

今回、ニュースレターの原稿を書いてみないかというお話を安藤寿康先生から頂き、ありがたくお受けすることにしました。一体何を書いたら良いものかと、とても悩みましたが、今回は双生児学会でも一部発表させて頂いている私の卒業論文（1995 双生児の内的世界 上智大学卒業論文）の序論第三章「ふたごの主人公の物語－双生児の象徴性について－」から、第二節「ふたりのロッテ」をここで紹介させて頂こうと思います。

私は一卵性双生児ですので、自ら双生児をテーマにするということには「対象としての双生児」と「主体としてふたごを生きている双生児の自分」とが交じり、競い合う合う、なんともいえない面白さかつらさ（しんどさ）が常にあるように思います。そんな中で、自分の描く双生児イメージをいかに他の方々に伝え・あらわすかという試みが、私の場合（もともと心理学を学ぶ上で心引かれていた）深層心理学という分野を基本的手段とすることにつながっていったのだと思います。そしてまたここでご紹介するようなふたごの物語、あるいは神話や昔話を取り上げるということにつながってきているのだと思います。

ところで多少余談になりますが、今回ご紹介する「ふたりのロッテ」の部分ではあまり触れていませんが、実は私は卒業論文の中で日本人の心性と双生児の心性との関連について考察しています。精神病理やふたごの物語・昔話・神話、そして双生児としての自分のこれまでのまだ短い人生、さらに TAT で双生児の協力者のみなさんに書いて頂いた貴重な物語を、私はその時できる限り自分の中で反芻しました。そして、特に人との相互関係という視点から、心理学の世界で取り上げられる日本人の心性と双生児の心性が通じるところがあるのではと思うようになったのです。これは自我の問題と共にユング心理学などの自己の問題と絡んでいるのでは私は思っています。それらを卒論当時の私は、大胆にもふたごの物語を取り扱う中で自分なりにおり込ませ、恥ずかしながら卒論のあとがきにも書いたように無謀にも卒論を日本人の心性とつなげようと努力しました。もちろんそんな大それたことが一つの論文（しかも卒論）でできることはありませんでした。けれども、やはりこれらの考えは双生児に施行した TAT の考察とも一部つながるように思え、現在でも私には大変興味深いことのように思えてなりません。

この点に関して、私がまだまだ心理学を勉強している立場であること、私の研究が限られた協力者からの考察であること、また河合隼雄先生など心理学系の日本人論の一部の文献からの考察であるということなどから、まだ様々なひと山ふた山もあるかのような多くの検討・検証すべき点があるのは勿論です。けれども「日本人の心性と双生児の心性が通じるところがある」という考えは、私の一つの仮説として、ずっと研究の根底にある要素の一つです。いつか自分なりにまとめられたらと思っておりますし、又こうした機会があれば、未熟ながらもこの点に触れている卒論の物語の部分もご紹介させて頂ければと思います。尚、今年の 6 月に刊行された「ふたごの話、五つ子の秘密」（1998 武 弘道著 講談社）の中でドイツ文学ご専門の志村恵先生も私の仮説にやや近いと思われるような見解のコメントを載せておられるのを拝見して、とてもうれしくまた心強く思いました。

多少話がそれましたが、私がどのような視点から「ふたご」あるいは「ふたごの物語」とらえようとしているのか、なんとなくおわかり頂けたのではないかと思います。以下ご紹介する私の「ふたりのロッテ」の文章は、“ふたごがふたごの物語をどう読むか”という点からの一つの解釈として読んで頂ければ幸いです。また論説に甘い点（自分でも曖昧な点）もあり、アドバイス頂ければ幸いです。

尚、今日を通してみると、自分で読んでわかりづらい表現や硬い語調などが気にかかり、今回の原稿では一部省略の他、そうした部分や明らかな入力ミス等の訂正、前後を読んでいないために不明確になる部分の補足など若干の修正を加えています。

（以下前述卒業論文より引用）

「ふたりのロッテ」

—双生児の対称性が強調されるとき（双生児が異なる環境で育つということ＝環境が双生児に与える影響・双生児が周囲に与える影響）—

(略) 昨年のTATの結果(1994 双生児間の相互関係について 上智大学3B論文)では、家族関係の有り様が双生児の相互関係に影響を与えていることが考察された。あまりにも極端と思われる例はさすがになかったが、一卵性といえども、特に親子関係の有り様・夫婦の有り様が二人の差異に影響を与えていると思われた。一卵性双生児なのだから全く正反対とは行かない。持っている複数に分けられる性質の強度がそれぞれ少しずつ違うという形で現れるように思われた。また、全体の傾向は同じだが、崩れているか崩れていないかといった違いとしての印象も受けた。いずれにせよ、一卵性双生児の場合、二人のあいだに違いがあればある程、どこか二人の関係は本来的でない、つまり負荷がかかって歪められていると考えられる。それぞれが全く健康的にそれぞれの道を歩んでいる場合には、差異と類似という次元を越えている。“ふたりがそうあるべくしてそのようにただ在る”という、二人が深刻な張り合いをすることなく、またもたれ合うことで対決を避けることなく、ただ“相手をそういう存在として認める”状態。しかし、自分を脅かさないものとして双子のきょうだいを認めることが出来ることは、実は大変難しいと思われる。普通のふたりきょうだいでさえも、一人がいい目を見れば耐えがたいものがあるだろう。それが自分と遺伝子が全く同じ人間になったらどんなにか我慢のならないものかということ想像していただきたい。

受験を例に上げる。きょうだい、特に二人きょうだいであつたら、どちらかが優秀な大学に行き、もう一方はまったく見込みのない浪人生活を続けているという状態で激しい嫉妬にかられるというのは、一般的に理解しやすい。しかしもともと年の違う兄弟は、お互いの違いを理解しやすいものである。年齢は絶対的に違う。顔もそれほど似てない。むしろきょうだいは差があることから葛藤が生じるのだろうが(お互い、自分では持っていないが相手が持っているものに対する嫉妬を感じるということ)、しかし差があることで、また了解もしやすいのではなからうか。自分とは違う人間なのだという基本的理解が二人をむしろ違う方向へ進ませることを容易にさせるのではないだろうか。もともと遺伝子が違うので、違う方向に歩いてゆくことに(自分の適する方向なら)無理がない。対決を避けることが出来るのである。

男子二人兄弟にタイプテストを試みた上智大学の学生の卒論があるが(伊藤直美 1994 ふたりきょうだいにおける光と影 上智大学卒業論文)、二人兄弟は正反対のタイプを現しやすいという結論を考察している。これは先のことを裏付ける。二人兄弟は遺伝子が違うため、お互いの存在があることによって、自分が持っていて相手が持っていないと思われる性質を強めて生きやすい、ということが言えるのではないか。そうすることでアイデンティティを確立してゆくのである。そうすることが最もアイデンティティを確立しやすい方法と言えよう。ここで、おそらく問題となってくるのは二人の類似の程度・差異の質であろう。例えば社会や特に親が安易に好ましいと一般的に思うような性質(学業など)をどちらかが強く持っており、そしてそれに関して家族のきょうだいに対する対応がまずい場合、一方はたとえ自分がもう一人よりも何らかの優れた性質を持っていたとしても、それを磨くよりも一方に対する僻みや嫉妬が強くなり、個性的に生きることが困難になってしまうかもしれない。しかし、絶対的に違う年齢差は、幼児期に特に大きく発達差を生じさせることはまちがいない。兄は何があろうが弟よりも先に一年生になり、かけ算を習い、卒業式にでるのである。兄は兄として絶対的な優越感をそこに見だし、そのことで弟に脅かされることはない。“結局上の子はどこかで下の子に対し手加減を加えているし、下の子はそれに甘えているのである”という事実は、「新・児童心理学講座⑩家族と子ども」(1991, 金子書房)にも書かれている。またこの文献には、きょうだいの能力差が縮まるほど上の子の不安感が強まり、緊張関係が生じやすいと述べられている。このことは双生児の葛藤の大きさを物語るといっても良い。もしきょうだいでありながら二人の類似度が高い場合、それは双生児のような葛藤が生じやすいと考えられよう。もし双生児にタイプテストを行えば、一卵性では同じタイプに分類でき、二卵性であれ

ば類似度が低くなるほど兄弟に近くなると予想できる。

ところで、双生児の場合の葛藤はどうなるだろうか。一卵性双生児の場合、遺伝子は同じである。いわば“同じ人間”なのである。明らかな違いを持って生きるという普通のきょうだいのようなアイデンティティの確立の仕方は極めて困難である。同じ方向に興味があり同じ方向に才能を持つ遺伝子レベルで同一の二人は、常に一方を意識し、その存在を脅かされているのである。受験の時に、普通のきょうだいなら学部などを変えることは容易な場合もある。しかし一卵性は難しい。同じようなところを二人して受け、しかしどちらかが落ちることは起こりうる。その時の敗者は、いったいどのように自分の境遇を認知すればよいだろうか。自分と“同じ”人間は受かってしまっているのである。勿論、適切に育てられた双生児であれば、その時の調子や問題の傾向、自分の努力などに帰することが出来るだろう。しかし、もし二人の差異にあまり敏感でなく育てられたり、あるいは落ちた方が不幸にも「兄」・「姉」として普段一方よりも一段上に扱われている場合は悲劇的である。自分より劣っていると（思っている）一方が合格して自分が落ちるという状況を受け入れることがとても難しいだろう。妄想的に双子のきょうだいを取り込んでしまい（自分と双子のきょうだいの境が曖昧になる。それは双子のきょうだいが自分の支配下に在るべきものだという確信にもとづいているようだ）、自我肥大を起こしたりする可能性はないだろうか。双子のきょうだいを取り込んでおきながら、双子のきょうだいに対する徹底的な下の身分に押さえつけようとする態度も強烈になり、自分は all good、双子のきょうだいは all bad というスプリットされた認知は（その背後には逆ではないかという不安が隠されているのだが）、ボーダーラインパーソナリティを思わせる。このように考えると、いかに一卵性双生児が二人異なって生きることが難しいかが良くわかるのではないだろうか。二人異なって生きることが難しく、対決しきれないと、二人が社会から閉鎖されてもたれかかって生きてゆくという孤立を生じることも考えられよう。

そこで、もし一卵性双生児がかなり明確な差異を恒常性を持って生きていたとしたら、それはどこかに無理が生じているとも考えられる。これから取り上げようとしている「ふたりのロッテ」（エーリヒ・ケストナー、高橋健二訳、1990、岩波書店）は、この問題を見事にとりあげているように私には思われる。そしてこうした問題が、家族関係の有り様に大きく左右されており、また双生児の存在が本来的なものに立ち返ることで、家族も好ましく変容を遂げていることにも注目したい。つまり、双生児の存在が周囲に与える影響についてもここで考えることが出来ると思われる。この物語の解釈については河合氏は大きく取り上げているものは無いようだが、著作集「こどもの宇宙」の「児童文学の中のもう一人の私」という章で小さくとりあげられている。河合氏のコメントは、両親にとっての双生児が象徴するものを中心に幾つか紹介したい。さて、「ふたりのロッテ」とはどのような物語なのだろうか。以下、簡単に物語の粗筋を紹介する。

この主人公の女の子のふたごは、両親が離婚したことからお互いを知らずにそれぞれ片親と一緒に別れて暮らしていたが、夏の休暇に訪れたサマースクールで、二人は出会うことになる。二人は、お互いがふたごのきょうだいだということに気付き、今まで知ることのなかったもう片方の親に会うための作戦を思いつく。それは二人が入れ替わって家に戻ることであった。二人は十分お互いの環境を知り尽くした上でそれぞれの家に帰り、新しい自分を演じるようになる。そこで、父親のほうに再婚話が持ち上がり、父親の元にいたほうが熱を出して精神的に大変な状態に陥ったところで、両親が再開することになる。そしてふたご二人の“みんなで一緒に暮らしたい”という願いから、昔の夫が成長したことを認めた母親が父親に呼びかける形で、二人はもとのさやにおさまることになるのである。

あらすじを紹介するとこんな風になるだろうか。まず、異なる環境で育った、対称的な性格を表しているふたごの様子をさらに詳しく考えてゆくために、もう少し細かい点に関して物語を見てみ

たい。

二人は物語の始めでは、確かに河合氏も指摘しているように、対称性のある性格が描かれているように思われるのはまず間違いがない。河合氏は“この「ふたりのロッテ」の性格がまったく相補的であることは、誰の目にも明らかであろう。”と述べている。相補的ということは、二人が性質的に異なるものを象徴するということの意味する。しかしこれは正しいだろうか。何故なら二人はその容貌の類似性の強調や後にわかる性格の類似性から、一卵性と思われるのである。一卵性が全く正反対の要素を半分づつ表現するはずはない。遺伝子が同じだからである。

たしかに、働く母親の代わりに家事をこなす、しっかり者の控えめなロッテと、音楽家の父のもとで、お嬢様としてやんちゃに元気に振る舞うルイーゼは、一見相補性があるように感じられる。しかし、二人がまったく半面のみを生きているのではないことが、物語のはしばしに実は散りばめられているのである。つまりロッテの持つ性格をルイーゼも、ルイーゼの持つ性格をロッテも、同じように性質として持っているということ、物語のなかでは最初から語られているのである。例えば、ルイーゼが二人でレモン水を飲んでいて、思い立ったことのために慌てて店を出ようとしてお金を払い忘れそうになったところで、店のおばさんに止められた。その時のおばさんの声のかけかたは決して恐いものではない。しかし、やんちゃなはずのルイーゼは、事もあうろに“おびえながら”お金を払ったのである。ロッテが、おとなしいだけでなくしっかりして、肝玉のあるところは、随所に描かれているのでここでわざわざ取り上げることもなかろう。そして、めでたく両親が元に戻ってきたあたりではと思うのだが、すでに最初に強調されていた二人の相補性は描かれなくなっていることに気付くのである。最後には、最初に二人が出会ったときに撮った二人の写真を見て、双子たちは自分がどちらかわからないといったエピソードで話がくくられているのである。これは一体どういうことだろうか。

それはつまり、二人が同じ性質を、本当は最初から持っていたということを暗示しているのではないだろうか。ふたりは片親の環境で、それぞれの性質を歪めた形で表していた。それが相補性となって表れていた。しかし、本来の姿ではなかった。二人が入れ替わったのは、まさにバランスを取り戻すため、本来のふたごの姿に立ち戻るためでもあった。二人が入れ替わって以前よりもより良い状態として周囲から評価されていることも興味深い。半面同士が単に結合するのではなく、入れ替わって演じているというのがミソである。さらに、上手に演じていることもミソである。全く持っていなかった側面ではなく、有していた能力ということがわかる。つまり、双子にとって半面しか生きていないことは矛盾だったのである。二人が本来の見分けのつかない二人になったとき、二人は本当の二人になったのである。二人が自分達でも見分けがつかないというラストは非常に興味深い。ふたごはそういうものなのだ、とでも言うかのように感じられる。両親の結合は、双子二人の男性性（父親）と女性性（母親）のバランスの回復を象徴するとも受け取れる。

この物語は二人が本来的な「似ている」状態に立ち返るところまでで話が終わっている。つまり、歪められた二人の違いがいかにも意味がないかということである。それは二人が個性的に生きていくことにならないのである。二人が本当に個性的にそれぞれの道を歩んでゆくには、まず本来そっくりであるべき二人を、自らが受け入れる必要があったのではないか。それは辛いことである。自分と似ている人間なんて、いないほうがいいにきまっている。ルイーゼがロッテに初めて会ったときの、あのひどい腹の立ち用はその事を良く表している。物語はここまで、ふたごが自分達の類似性があるがままに受け入れるところまでを描いているといってもよい。そして自分たちのそっくりさを受け入れて初めて、二人は真に自己と対決せざるをえなくなる。そこから本当の個性化の過程が始まるのだろう。または、こう考えてもよい。二人が初めてであったとき、たしかに似ているが性格に相補性があった。元気なほうとおとなしいほうと。それは影との対面でもあったと考えて

もよい。しかし、最初の腹立ちは似ている存在に対する怒りであった。ここで、影のように思われていたものが、それを通り越すと、実はセルフに近いものであろうことが予測される。そして実際、二人は手を取り合うことで影を通り越してセルフに導く「もう一人の私」という存在になったのである。このように考えると、この物語が、ふたごが如何に精神的に成長してゆくのかということを示しているように思われてならない。その成長の妨げになっているのは、家族の力動であることはいうまでもない。

さて、では両親にとって双生児はどのような意味があったのであろうか。そしてふたごはどのような意味を象徴するのだろうか。河合氏は両親を視点として双子の物語を次のように理解している。

“ルイーゼとロッテの苦労は、結婚という両性の結合の背後に、いかに多くの努力が必要とされるかを、ケストナーが象徴的に語っているようにさえ感じられる。夫婦がめでたく結合を完成させてゆくためには、「もう一人の私」とも言うべき半面との結合の努力が必要なのである。双子の子どもたちは、そのために「冒険、涙、不安、うそ、絶望、病氣。ありとあらゆる目にあいました」とケストナーは語っている。「もう一人の私」との付き合いは、やはり一筋縄ではできぬことを、この話はよく示している。”（前述 287pp）

（一段落省略：この指摘に対して私は双生児の独自性が薄れることなどを述べているが、やや曖昧だったのでわかりやすさを優先して今回は省略した）

ここでもう少しよく両親の問題を考えてみたい。母親は出版社（ロゴスを象徴？）に勤めており、キャリア・ウーマンである。このことは、ある程度彼女が精神的に成長をしていることを表しているようにおもわれる。また、同じく父親も音楽家として描かれており、女性的な部分がある程度自分のなかに発見している人間として表現されているように思われる。しかし、二人とも内なる男性性・女性性に飲み込まれてしまっていた。だからこそ反動で二人は親になりきれなかった。母親はロッテと一緒に“とても母親に見えない”と記述され、その若さばかりが表現されているのが目につく。また、仕事に追われる日常の様子もこの事を裏付けるだろう。父親はといえば、やはり仕事に没頭しているのは同じだが、アニマ的な女性にひかれる青年の様なロマンティックな恋愛をしている。二人は異性性をあくまでもある程度磨くことは出来ていた。しかし、ふたごの子供たちによって、さらに成長を促されることになったのである。しかも自分が育ててこなかったもう一人のほうの出現によって、入れ替わった子供によって自らの生き方の偏りを指摘されたのである。つまり、ふたごの出現が両親のさらなる統合（結婚）を促進する役割を果たしているのである。そっくりだが、しかし異なる双子の娘の入れ替わったの出現によって、そのそっくりなのだが絶対的にある微妙な違いが両親の内省を生じさせ、さらなる個性化の過程へと導いたのである。

こう考えると、確かにふたごの存在が結合の困難の象徴としてでなく、さらなる個性化の過程へと導く役割を象徴しているという事が感じられるのである。これは双子が周囲に与える影響を考える上でも興味深いと思われる。似ているが別個の人間が存在している。この物凄く類似と微妙な差異の感じられる人間に対して、人は何をイメージさせられたのだろうか。物語では入れ替わって少し様子のちがう娘が現れるのだが、それでも、娘が以前と少し違ったという印象が両親に内省を促していることは興味深い。それが目の前に同時に現れたら、人の心のなかにはどんな気持ちが生じるのだろうか。どんな事がふたごに投影されるのだろうか。やはり、個性化の過程を促進するような部分があるのではないだろうか。「二人兄弟」の節で紹介した、ノイマンの神話研究（林道義訳 1985 意識の起源史 紀伊国屋書店）や志村恵氏の文学からの考察（1995 文学における双子像 日本双生児学会ニュースレター第 17 号）の二元的意味合いを双子は象徴するのではないかと言うコメントがここで思い出される。つまり実際の双生児にもこのようなイメージは生き生きと投影されているのではないか、ということである。

以上をまとめると、この物語では、ふたごにとってもきょうだいの存在は影との対決からより統合された行き方を進むための促進的な存在であったと同時に、周囲の人間、両親にとっても、二人の存在が内省を促し、個性化の過程を導く存在として象徴されていたと考えることが出来るだろう。それはやはり、影とは異なって独立した、そっくりな二人元型（双生児元型）として理解できるように思われる。

（以上引用 44 p - 54 p）

これまでご紹介した「ふたりのロッセ」を読んで頂いてもお分かりかと思いますが、私のふたご観を当時卒業論文の最後にこのようにまとめました。

“…ふたごはこうした象徴性のなかを生きているのではないだろうか。自律と共生の狭間で、そして、自己（セルフ）と自我の狭間で、発展と破滅の狭間で、双生児の内的世界は二人の間に深く静かに広がっているのである。”（1995, 前出 166p）

かなり大袈裟で恥ずかしいのですが、イメージとしては今でも変わりはありません。ところで、最近発行された「季刊ツインズ」（1998, ビネバル出版）で、志村恵先生が「ふたりのロッセ」をとりあげて記事を書いておられました。文学者の視点からの文章を大変興味深く読ませて頂きました。その中で、先にあげた文章と非常に似て異なるものがあり最後にご紹介させていただきます。

“…一人ずつでありながら、二人一緒の双子でもある。自立と共生の緊張にある双子にとって、重要な問題です。”（1998, 前出 50p, 下線小島）

志村先生の「自立と共生」そして私の「自律と共生」。似たような表現にも見えますが、実は二つの間にはかなり隔たった感覚があると私は思っています。というのも、私は、意図的に「自立」をさけ、あえて「自律」を選んだのです。そこに、私のいろいろな要素によって導かれて到達した（あるいは到達しつつある）双生児の在り方のイメージがよく現れていると思っています。

つまり、ふたごは自我の確立をしてバラバラの個になるのではなく、一度個の確立をとげて新たな（ふたごのかたわれとの）共生関係に入る、というのが私の今の未熟ながらの見解です（これは小此木敬吾先生が広く紹介されているアジャセコンプレックスにおける日本の母子関係の考え方と通じるのではというイメージを持っています）。この新たな共生関係は単にもたれあうのではなく、有効にそっくりであることを機能しあえる関係ではないでしょうか。ですから「自立」ではなく「自律」なのです。自立と共生という場合、一人一人、別々の個が表面的に共に生きる（“居合わせる”とか“二人一緒”）ニュアンスだと私は感じますが、「自律」という場合、“二人で一人”を生きていながらも“一人一人”の自律性を保っている、というような、私のイメージする（一卵性）双生児の特徴がとても良くあらわせるのではないかと思ったのです。ここにこそふたごの特徴があり、ふたご独自の個の確立のしかたがあると私は思うのです。これは一見マイナスに思われるかもしれませんが。しかし有効に機能する場合、これは大きなプラスになると私は思っています。そしてまた、自律という言葉には、そばに“そっくりなもう一人の私”がいながらも、影響されずに（あるいは影響されながらも）自分の個性を見つめて生きることができる、という意味合いも私は感じているのですが…。

私のこうした考え方は、もしかしたら実際の双生児とずれているかもしれません。けれども、これから私が双生児を対象に研究を続けてゆく中で、私の双生児イメージの中心として、柔軟に対応しながらも、検討を続けていきたいと思っています。諸先生方からのご指摘、ご教示頂ければ幸いです。

最後に、このような機会を与えてくださった安藤寿康先生に心より感謝いたします。

